

猪名川河川敷利用対話集会・円卓会議川西会場総括

ファシリテーター：片寄俊秀 2003.12.7

1 実施内容

1. 提出された意見は全部で22通あった。(うち6通は意見書のみ)
2. 円卓会議の概要：8名の方に意見を発表・議論していただいた。流域委員会からは出席依頼に応じて3名、さらに会場にはあと1名の委員の自主参加があった。
3. 意見発表者の選択においては、時間的な制約から、総数で8名ぐらいが適当であると判断し、意見書の内容を検討して、原則として積極的利用を主張する方と、保全復元を主張する方が人数的にバランスするように心掛けた。また淀川の例をみても、若者と女性は応募数が少ないので、優先して選択させていただいた。また、選択されなくても会場にいられていた方には、優先的に会場での発言をお願いした。会場からの発言も相当数いただくことができた。

2. 円卓会議を行った意義

1. 初めての住民同士による円卓会議であり、このような機会を通じて相互の理解が若干なりとも進む可能性があることを期待したが、スポーツ関係者には「なんとしても存続すべき」の危機意識が強くあることが確認されたにとどまった。
2. とはいえ「新規の利用拡大」については、会場内ではある程度合意形成できたと思われ、一定の歯止めになった可能性があり、今回開催したこと自体にはそれなりの意義があったのではないかと思われる。
3. とくに、論議を進めるなかで、「河川敷の利用は縮小を基本とする」という基本方針に対する危機感が強く、なぜ「縮小を基本とする」のか利用者側の理解がまだまだ不十分であり、なお様々な方法でのPRや、具体的な事例の提示を早急に行う必要性が明らかになった。

3. 出された主な意見とファシリテータの感想

1. 淀川の円卓会議でもそうであったように、意見の土台がまちまちで、議論がなかなか噛み合わなかった点は否めない。
2. 当初は、他人の意見に耳を傾けようとしなかった人も、議論が進む中で、相互に新しい発見があって若干改善された事例も見うけられた。
3. 河川敷利用者の意見としては、二つの意見があることが明らかになった。

堤内に施設が無いから、河川敷を利用せざるを得ないとするもの。この方々には、場所が無くなるという危機感がつよくあり、現状を死守するとの意見まであったが、同時に、他に行く場所さえあれば出ていく気持ちはあった。

ここまで稠密に開発された都市における河川敷空間は、グラウンドや公園や花壇、芝生等として、都市的な利用をするのが本来の使い方であるというもの。この意見は保全・復元と真っ向から対立する考え方であり、着地点を見つけるために相当な論議と理論的な考察および具体的な技術や手法の開発が必要であると思われた。

4.積極的利用を主張する方でもこれ以上の河川敷利用はすべきでない、現状凍結ないしは若干の縮小は必要との意見が多く出されており、この点は大いに注目すべきであろう。

5.保全・復元を主張する意見には、猪名川河川敷があまりにも過剰利用されており、ようやく機運が巡ってきたこの機会に、将来を見据えて今こそ自然復活にむけて総力を結集しなければならないとしながらも、いま直ちに全面的に利用を停止すべきというわけではなく、一歩一歩着実に進めるべきとの意見が多かった。

6.中間的な意見として、生態系の保全の必要性を十分認めた上で、すみ分けの方法を追求して、土地利用区分を行ってある程度の都市的・施設の利用も認めるという、両立を求める意見も複数あった。

7.興味深い点としては、どの意見も「子どもの健全な育成のため」が目的であるとしていたことであり、この共通点を具体的に追求することで両者の歩み寄りの余地があると判断された。たとえば現在、少子化の影響で学校統廃校が進められつつあり、尼崎市では廃校敷地を売却する方針が出されているとのことであるが、その敷地をグラウンドに使うことで代替え地が確保できるから、自然復元と利用推進の両方が協力してその実現運動をしましょう、という注目すべき呼びかけの意見も出された。(もっとも、これについてスポーツ関係の方からの賛同意見は出なかった。)

4. 今後の方向

1. 一定の結論を導くためには、このような対話の場をなんらかのかたちで継続する必要があると思われる。

2. その場合、共通の土台を得るために、たとえば今回の意見発表メンバーに再度参集していただき、現場を視察した後に議論を行うという方法はどうか。またその際、堤内地におけるグラウンド転用の可能敷地についても候補地をあげて現地視察ができるとなおよいと思われる。

3. さらに次なる展開としては、「河川敷の利用は縮小を基本とする」という基本方針に対する是非、「河川保全利用委員会」を設け事案毎に同委員会で議論するという方法についての是非、段階的な復元方針とその具体例などについて、一つ一つ具体的に議論することが河川整備計画を着実に進めて行く上で重要であると思われる。